Letters
Arpak
レターズ アルパック
VOL.235 ISSN 2432-5295

本

CONTENTS

◆【本】…01～04
・図書館網をつくる ・「土を喰らう」が意味すること ・本棚をキュレーションしよう ・本の贈り物 ・不易流行 ・多様な本屋の未来を期待 ・地理をまなぶ
◆今、こんな仕事をしています…05～08
◆新人紹介…09
◆近況＆イベントのお知らせ…09～10
◆まちかど…裏表紙
・大阪事務所近辺の個人書店に遊びに行きました

本

「若者の本離れ」というのはよく耳にする言葉。本を読まない理由はいくつか考えられますが、以前にはなかったものとして「読まなくても本の中にある情報を得ることができる」ということがあるのではないでしょうか。Web上で検索すれば大体のことはわかりますし、いわゆるネタバレサイトのようなものもあります。

『映画を早送りで観る人たち ファスト映画・ネタバレ－コンテンツ消費の現在形』（稲田豊史、光文社新書）という本があります。映画の面白くないシーンは早送りし、ストーリーに直接関係する部分のみ見るという人が増えているそうです。映画を楽しむというより「情報」として効率的に得たいというニーズ、それは情報に溢れた社会環境が背景にある、というのです。

本も同じかもしれません。「情報」を得るツールとのみ捉えればWebの方が圧倒的に効率的です。本を読む人と読まない人の違いの一つは、紙の本の重さや手触り、インクの匂いなどを感じながらページを繰る時間に価値を見出すかどうか、ということでしょうか。

今回のテーマは「本」。本との向き合い方から一人ひとりのキャラクターを探ってみてください。

レターズアルパック編集委員会

図書館網をつくる

三輪泰司：
名誉会長

奈良市の社会教育委員に就任したのは、53歳の春1984年（昭和59年）4月でした。或る市会議員に社会教育施設のことを語ったのが、教育長か市長の耳に伝わったようです。

社会教育委員は公務ですが、〝独任制〟と言って、「委員会」も「委員長」もなく、委員一人一人が単独で、又は「委員会議」として、この場合は市教育委員会へ、提言や意見をいうのです。さて、何を提案するか？

「本」でなければならない！

実は、就任1ヶ月前の1984年3月、京都駅南口再開発―「アバンティ」が竣工しました。そのキーテナントは、本屋さんです。基礎調査で、尾関さんが研究しましたね。「本」は、常に20万点が世に出ています。大阪梅田にも大型書店が立地しています。強力な「集客力」です。ワンフロア全部「本」で行こう。読書は子供の成長と同じ、スポーツと同じ、ステップアップするのです。開かれた「図書館」で行こう。

奈良市社会教育委員会議は、1975年（昭和50年）4月30日に「図書館計画」を提言していました。1977年（昭和52年）4月、市立図書館が開館しています。それから7年、状況は変っています。「関西学研」が動いていました。1978年11月、関西での「国立図書館設置」を盛り込んだ近畿圏整備基本計画が総理大臣決定。1982年8月「関西プロジェクト」として発足していました。すぐ近くに出来るナショナル・ライブラリーと繋ぐのです。

「図書館ネットワーク」だ！

社会教育施設は、学校教育と違って、全国一律ではありません。「図書館」は〝東高西低〟でした。東京と千葉を調べに行きました。

市民の目線で行きましょう。奈良市は東に広大な山間もあります。ブックモービルでサービスしよう。農協スーパーにも基地を置かせてもらいましょう。16ヶ所できました。通勤・通学・お買い物のついでにと、近鉄奈良駅前など「返却ポスト」をつくりました。次に地区館。1984年（昭和59年）1月、西部図書館完成。1989年（平成元年）6月30日、元市役所跡の「ならまちセンター」に置く東部館は、旧図書館を統合し、中央館を兼ねる。これらの設計はコンペにしました。高の原の北部館は、遅れて2004年（平成16年）にできました。かくて、10年。提言の実行を見とどけ、1993年（平成5年）10月31日退任しました。11月3日、大川靖則市長から「功労者表彰」を頂きました。

アルパックが、奈良市の総合計画や公民館の仕事で忙しくなったのは、退任してからです。

因みに、このLetters Arpakは、創刊以来、国立国会図書館へ納本しています。「ISSN-国際標準逐次刊行物番号」が与えられています。ナショナル・ライブラリーのネットワークと繋がっているのです。

奈良市立中央図書館

「土を喰らう」が意味すること

末次優花：
都市・地域プランニンググループ

おばあちゃん家の自慢のコシヒカリです

来る十一月十一日に、映画「土を喰らう十二ヵ月」が全国で公開されます

映画「土を喰らう十二ヵ月」は、作家・水上勉さんの料理エッセイ「土を喰う日々―わが精進十二ヵ月―」を原案に、中江裕司監督が脚本を手がけ、オリジナルの物語を紡ぎ出し映画化された作品です。主演は沢田研二さん、キャストに松たか子さん、檀ふみさんなど素敵な出演者がそろっています。九月二十日には中江裕司監督自らが映画を小説化した本も出版されました。

この作品は「食べること」「料理」に大きな役割があり、料理にも力が入っています。料理は「一汁一菜でよいという提案」等の著者である料理研究家の土井善晴さんが担当されました。

信州を舞台に、十二ヵ月の季節の移ろいのなかで、食べること、生きることを見つめ直すお話です。映画公開が今から楽しみです。

毎日「土」と向き合うことで、四季折々の「旬」を生活に取り入れる

「土を喰う日々―わが精進十二ヵ月―」は、ずっと気になっていましたが、面白くて読書に熱中してしまい仕事が疎かになる不安があり、読めていませんでした。先日この機会にと心を決めて読みました。

この本では、水上勉さんが9歳から禅宗寺院に入寺して学んだ精進料理が基礎となり、一～十二月それぞれの「旬＝土から作り出されるもの」が紹介されています。お寺横の畑で毎日「土」と相談しながらその日の料理を決める。旬を喰らうことは土を喰らうこと、精進料理とは土を喰らうことだと水上さんは書いています。

私の今の生活を振り返ると、土に直接触れることなくスーパーで買った食材を食べる日々。便利な世の中に甘えている自分に気付き、今の生活が虚しくなりました。そこで、まずは出来ることからと思い、おばあちゃん家に稲刈りの手伝いに行きました。また、アルパックで農業（農空間）や自然、土地利用など「土」に関わる仕事にも携わっているため、人と土のつながりを大切にしながら取り組みたいと思います。

本棚をキュレーションしよう

坂井信行：
ソーシャル・イノベーティブデザイングループ

みなさんの本棚はどのように本が並んでいますか？蔵書が増えてくると困るのが本棚にどう並べるかということです。単純に読んだ順に並べるというのも良いのですが、探しやすいように何らかの分類で並べたいと思うのではないでしょうか。

本の分類法としては、図書館で採用している日本十進分類法というものがあります。総記（図書館、書誌学など）、哲学（哲学、心理学、倫理学、宗教）、歴史（歴史、伝記、地理、紀行）、社会科学（政治、法律、経済、統計など）、自然科学（数学、理学、医学）、技術（工学、工業、家政学）など10の区分を基本に階層的に設定されたものです。無味乾燥というか、そもそも個人の蔵書にはジャンル的な偏りもあって分類としては使いにくいです。

一方で、書店ではそれぞれ独自の分類を行なっているようです。某大手ネットショップでは、社会・政治、化学・テクノロジー、投資・金融・会社経営、教育・学習・受験など、少しイメージしやすい分類になっています。また、特定のテーマでの選書や有名人などによる選書を展示している書店もあり、個性を競っている状況もみられます。いわゆる本（棚）のキュレーションです。

分類に加えてもう一つ難しいのは、文庫本から大型本までサイズの違いをどうするかということ。同じ分類の本でもサイズが違うものが混在するので、本棚に並べた時の見栄えや収納性を考えるとある程度サイズごとに並べた方がよいので考えどころです。

個人の本棚はその人の頭の中が表現されたものともいえます。私自身も、誰に見せるわけでもなく、また全くできていないのですが、自分なりの感性で本棚をキュレーションしたいと常々思っています。しかし、積読も溜まる一方で、なかなか着手できないのが目下の悩みです。

本の贈り物

杉本健太朗：
建築プランニング・デザイングループ

本にまつわるエピソードとしては、高校を卒業する時に恩師から新書を頂きました。大学受験がうまくいかず、浪人することが決まって、春休み中の学校の職員室を訪れた際に、高校2年時の担任の先生から、読んでみるといいよ、と勧められました。新書のタイトルは『科学の現在を問う』（村上陽一郎著）。恩師は、社会の先生で、授業では地理と世界史を教わりました。高校時代は、理系科目よりむしろ世界史の授業が面白くて、高校時代に学んだ基礎知識が、今でも世界情勢を知る上で、ベースになっています。大学受験は、理系を選択しましたが、これからもう一度受験を頑張って大学に進み、専門分野を学んでいくにあたって、科学と社会についても意識しておきなさいという先を見据えた励ましの贈り物だったのかなと今思い返しています。

さて、恩師から頂いた新書ですが、本の帯にあるように、原発、先端医療、情報化がもたらす弊害から理科教育の問題点まで、科学と技術の発展は、人間を幸福にしたか？についての問いを投げかけています。発刊は2000年で現在から20年以上経過しており、この間にスマートフォン、LEDなどの普及、iPS細胞の研究、AI技術の発展、新型コロナウイルス感染症のパンデミックなど社会を一変させる様々な出来事がありましたが、久しぶりに本書を開いてみても、考えさせられる内容が沢山ありました。特に科学・技術と倫理については、（まだまだ勉強中ではありますが）建築・都市・まちづくりに関わる一人として、倫理観、社会的責任を常に持っていなければならないと改めて思いました。

本というのは不思議なもので、新書を先生から頂いた場面やその前後の記憶を何となく覚えていますが、あれから年月が経って、同じ文章を読んでいるはずなのに、考えることが違ってきます。なるほど、本を贈るということは、その瞬間の想いや伝えたいメッセージに加えて、未来の相手にも贈っているんだなと思いました。私も機会がある時には、本の贈り物をしたいと思います。

不易流行

山本貴子：
地域再生デザイングループ

今年、私が生まれ育った街の図書館について、今後の在り方を検討する業務を受託しました。業務をきっかけに、十数年ぶりに図書館に行ってみると、昔と変わらない姿の建物と書架とこぢんまりとした椅子があり、一瞬で、通っていた当時の記憶が蘇りました。

小学生の頃は、毎週土曜日、図書館に通い、子どもらしく、怪談話やおまじない等の本も読んでいましたが、特に、遠い昔の遠い国の物語を好んで読んでいました。いま思うと、幼いなりに、自分のまわりの小さな世界を出て、知らないところに行ってみたかったのだと思います。

中学生になると、時々、仲のよい友人と一緒に図書館に行っては、少し背伸びをしてファッション雑誌を読み、早く大人になりたいなあと将来を見つめ、ひそひそとおしゃべりをしていました。

高校生になると、図書館に行く機会もぐっと減りましたが、たまにふらっと立ち寄り、土木・建築の書架の前に立ち、様々な本を眺め、自分の進路について考えあぐねていました。

こう振り返ってみると、私にとって、本を読むことは、好きな作家の世界に浸るでもなく、年齢や環境とともに変化し新たに生まれる探求心や好奇心を満たすでもなく、ここではないどこかに行きたい、自分ではない誰かになりたい、と渇望する自分と向き合うための行為であったように思います。そして、図書館は、静かに徹底的に自分と見つめ合うことができる、数少ない場所であったと感じます。

これからの図書館は、人口減少等に伴い公共施設の廃止や集約等が検討される中、読書離れやデジタル化等も進み、新しい姿が求められています。商業施設やカフェの併設、市民活動や交流の場としての機能の複合化、集客イベントによるにぎわい創出等どれも、これからの図書館に必要なことですが、やはり、図書館らしく、静寂の中で孤高の時間を過ごす場所であり続けることも必要だと、私は思います。

生まれ育った街の図書館が、今後どのような姿になるかまだわかりませんが、新しい中にも、変わらないものが残っていてほしいと、願っています。

多様な本屋の未来を期待

尾関利勝：
名古屋事務所　顧問

断捨離時代の本の処遇

事務所移転で、書籍の大半を思い切って処分した。地誌、歴史、都市、建築、経済、文化、芸能、小説など。新書、文庫が大半。手元に貴重な本を残し、段ボール五箱、宅配に渡し、後日、三千五百円が送金された。一冊五十円として、推定七百冊処分。

積読（在庫）は本の宿命

雑誌は読んで捨てるが、事例にしたい建築雑誌は保存。単行本はつまらない本以外は本棚に。二度読みすることは無いから積読（つんどく）。

本に救われた青春の悩み

生きることに悶々と思い悩む青春期。漱石『草枕』で**「どこに生まれ、住んでも悩みは変わらない」**と悟って、悩みから解放された。

経営の苦しさを本で紛らわす

名古屋で苦しい経営状況が続いた時、すがるように小説を読み、気を紛らわした。今は卒業したが、以来、小説乱読。名古屋開設時、糸乗さんに頂戴した池波正太郎『散歩のとき何か食べたくなって』がきっかけか。

読書は電車・バスの中。癒しの筆頭は、江戸下町人情話の山本周五郎。自称**「まちの町医者」**は『**赤ひげ**』の影響。平岩弓枝の御宿かわせみはほのぼのとして良い。藤沢周平が似ている。武家女性物なら澤田ふじ子（半田出身京都在住）。膨大な著作量。池波正太郎は江戸切り絵（商工図）収集家。つなぐと大きな地図になる精巧さ。見てきたように江戸の町を描くのは「切り絵」あってこそ。宮脇俊三（世界の時刻表マニア）、世界～日本の鉄道の旅シリーズは優れモノ。乱歩の明智小五郎は幼少期に乱歩が暮らした名古屋栄に記念碑をつくる檄文を依頼された機会に集中読破。

近代作家は宮沢賢治、芥川、鴎外、漱石、藤村、井伏鱒二、小林多喜二。ドキュメントは司馬遼太郎、沢地久恵、澤木耕太郎、柳田邦夫、民俗学柳田国男に地域の読み方を学ぶ。戦後社会派の野坂昭如、黒岩重吾、宮本輝、五木寛之、ディープな大江健三郎、発想が楽しい稲垣足穂。西山卯三『ああ楼台の花に酔う』は三高生の青春像がよくわかる。絵本はいわさきちひろ、街を描く安野光雅。乱読の跡は書ききれない。

本屋の行方

本屋が減る反面ネット図書流通、電子図書が広がる。昔は小さな町にも本屋があった。都心の本屋は超大型店に。近頃、癒しのカフェ兼小さな本屋があって、多様な本屋の未來を感じる。本屋に行くことが楽しい時代が蘇ることを期待している。

地理をまなぶ

橋本晋輔：
ソーシャル・イノベーティブデザイングループ

最近、家の近くにある区役所の図書館によく行っています。私の好きなコーナーは地理。地理コーナーには「幻島図鑑」「地名から読み解く日本列島」「ご当地ソング風景百年史」など、紀行文なども含め、タイトルを見るだけでわくわくするものがたくさん並んでいます。

図書館には小学生の子どもと一緒に行くので、子ども向けコーナーの本もよく見るようになり気がついたのですが、実は子ども向けの地理に関する本は「ドイツ」「近畿地方」などいわゆる社会科の資料集のようなものばかり。大人のように面白い切り口で地理を切り取った本はほとんどなく、お勉強、暗記教科としての地理という雰囲気が強く感じられます。地理は様々な社会の事象に関連しているのに、入口が狭すぎるように感じます。

大人の地理コーナー

今年度から高校で「地理総合」が必修科目となりました。地理総合ではテーマとして「国際理解と国際協力（生活文化の多様性と国際理解、地球的課題と国際協力）」「持続可能な地域づくりと私たち（自然環境と防災、生活圏の調査と地域の展望）」が掲げられるなど、社会的な事象を地理的な見方・考え方で学ぶことが重視されています。

基礎的な教養としての地理の重要性、社会を空間的に捉えることの大切さが再認識される中で、小学生など小さな子どもたちへの教育も変化していくことが期待されます。本も、もちろん資料集のようなものも大切ですが、それだけではなく、様々な子どもたちが関心を持てるような本が増えてきたら楽しいのになと、ひそかに期待をしています。

子どもの地理コーナー

知る・守る・伝え感じる、ふるさとの誇り「渥美窯」国指定３史跡の保存活用計画

岡本壮平：
都市・地域プランニンググループ

愛知県の渥美半島の先端に位置する田原市には、平安時代の終わりから鎌倉時代にかけて操業した中世陶器の一大生産地である渥美窯があります。

渥美窯は、三河地方で最大の窯業地であり、尾張地域の常滑窯・瀬戸窯の製品に先んじて各地に製品流通したなどの点で重要性が認められています。この渥美窯のうち、「百々陶器窯跡、伊良湖東大寺瓦窯跡、大アラコ古窯跡」の３史跡が、特に重要なものとして国指定史跡として指定されています。

この度、これら3史跡について、指定当時からの保存整備の取組や環境の変化などを踏まえ、将来に向けて安定的に保存・整備・活用を図っていくため、史跡保存活用計画の策定を支援しました。

国指定史跡と言えど手厚く保護されているものばかりではありません。民間所有の文化財では所有者の高齢化や相続などにより保存が危ぶまれるものもありますし、公共団体所有でも調査や保存・整備には多額の予算が必要で思うようにいかないケースも多くあります。

史跡整備の現況（伊良湖東大寺瓦窯跡）

大アラコ古窯跡　施釉陶器

国宝　秋草文壺（慶應義塾大学蔵）

そのため、渥美窯全体の価値、その中核となる国指定３史跡の本質的価値を再確認した上で、ふるさとの歴史・文化を誇るものとして、将来世代へと適切に保存・活用・継承していくための方針と施策内容を検討しました。特に重視したのは、未調査のまま地下に眠っている文化財の価値を明らかにするための調査研究の推進と、学校教育や生涯学習と連携した「ふるさと学習」での活用、並びに史跡周辺の公園や観光施設と連携した情報発信やＰＲです。

地域の子どもたちや人々がふるさとの魅力やすばらしさに気づき、誇りを感じる郷土づくりにつながっていくことを期待しています。

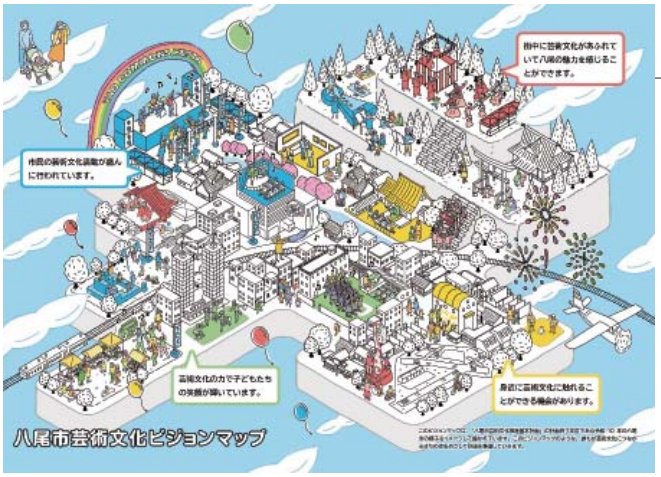
八尾市で「文化的コモンズ」形成に向けた条例＆計画ができました

江藤慎介：
地域産業イノベーショングループ

八尾市では令和４年４月に「八尾市芸術文化基本条例」が施行され、令和４年６月に「八尾市芸術文化推進基本計画」が策定されました。

レターズ２２９号（２０２１年９月号）でお伝えしたとおり、これからの芸術文化の推進に向けて、市内の活動場所や活動団体がつながり、誰もがアクセス可能な芸術文化活動の有機的なネットワーク（文化的コモンズ）を形成し、歴史資産や伝統文化を守りつつ、新しい文化を創造し発信するまちをめざす取組を進めており、条例や計画がこれらの基盤となります。

その後、審議会やワーキング部会、ワークショップ等を踏まえ、令和４年４月に「八尾市芸術文化基本条例」が施行され、６月に「八尾市芸術文化推進基本計画」が策定されました。条例では、「八尾市における芸術文化による創造及び交流の基盤の形成」、すなわち文化的コモンズを位置づけ、これを産学官民が連携し、審議会と推進会議をセットにして推進していくことが記載されています。また、計画では八尾ならではの文化的コモンズを『やおうえるかむコモンズ』と呼び、推進していくための具体的なアクションが記載されています。



令和 10 年度の八尾市の様子

また、令和４年７月に「八尾市芸術文化基本条例制定記念シンポジウム」が開催されました。「文化的コモンズ」の取組が既に行われている大分県別府市から山出淳也氏（BEPPU PROJECT ファウンダー）をお招きし、基調講演やパネルディスカッション「やおうえるかむコモンズ」って何？」を通じて、「生活の中に既に文化は蓄積されているので、まずは小さなことでも一歩踏み出していく」ことなどが話し合われました。

これから「やおうえるかむコモンズ」の形成を通じて、八尾市の人・まち・社会づくりに取り組んでいきます。ご関心のある方はぜひ一緒に取り組みませんか？

「まちらしさ」を発見する

筈谷友紀子：
ソーシャル・イノベーティブデザイングループ

みなさんは「相模大野」というまちにどのようなイメージを持っていますか？

東京近郊の中核都市、利便性の高いベッドタウンといったイメージでしょうか。私が最初に訪れて感じ取った印象は、清廉かつ人の温かみが残る現代のモデル的な都市、といったものです。

近年、消費行動の変化などにより大都市以外での百貨店の撤退が続いています。相模大野もその例外でなく、商業的拠点であった百貨店が撤退することで都市構造の変化が余儀なくされています。しかし、変化はチャンスということで、相模大野ではこれを機に新たなまちづくりを進めていこうとしています（都市の変化を利用するのが都市計画のよいところですね）。その一環で、市と区の共同で「市民」らによるまちづくりの取り組み（＝シビックアクション）支援が行われています。今回、私たちはその一部をお手伝いさせていただき、市民の皆さんが取り組みたいテーマやアクションを共に考えました。

市民がまちづくりに積極的に関わるきっかけとして、何か大きな問題（空き家や開発などの住環境に関わる問題など）が起きて、それに対応するため一致団結し熱く立ち向かうといったケースが多いと思います。しかし、相模大野では今あるまちの魅力をアピールしていきたい、もっと知ってほしいというポジティブで朗らかな気持ちが強く、参加者の間で共通していたように思います。また、隣接する町田市を意識しながらも、どこかマイペースに自分たちのリズムで歩んでいくようなそんな印象を受けました。それもまた相模大野という「まちらしさ」の現れであると感じました。

参加者の属性や性格はそれぞれ異なるけれども、どこか気質が似ている。参加者に共通するのは同じまちに住み、暮らしているということ。同じまちへの思いに共通するものがあるからこそ、どこか似るところがあるのでしょう。見方を変えると、どの街に住むかで、「私らしさ」というのも変わるのかもしれません。もちろん、どんな人が住むか（まちの思い方が多様になること）によって「まちらしさ」も変わるはずです。

全3回のワークショップを終えて、相模大野というまちは、ぎらついた熱さはないけれど、独特なリズムと朗らかさが持ち前なのだと、まちの印象・感じ方が変わりました。そんな個性的なまちの「個性」を発見し、愛でていくことをライフワークにしていきたいと思います。

中小企業の脱炭素経営につながる学びの場 2期を迎えます

植松陽子：
サスティナビリティマネジメントグループ

脱炭素化が本格的に加速するなか、Scope3を意識してサプライチェーンを通した影響を受ける中小企業でも、脱炭素化の経営的視点や具体取組が求められています。

全国自治体に先駆けて、豊田市では、ものづくり産業中心としたサプライチェーンを支える中小企業を対象に、自主的な脱炭素化の取組を進めていくための学びの場「豊田市脱炭素スクール」を、令和3年度に開講しました。

アルパックは、運営事務局として、カリキュラムの組み立てから、スクール運営、講師、企業からの相談対応など、トータルで支援を行っています。

スクールは、講義と演習を組み合わせた計10回のカリキュラムからなり、脱炭素経営の基礎知識やポイント、省エネ推進・再エネ導入の実践手法を学び合う内容となっています。受講企業の特性や実情にあわせてリスクと機会を捉えた計画づくりが進むよう、また今後も自主的に取り組んでいけるように支援をしています。

第1期は昨年10月に開講し、16社が参加しました。今年9月に開催された修了成果発表会では、全社に無事修了証が授与され、成果発表では、具体的な削減計画に加えて、脱炭素商品・サービスとしてのPRをされる企業もありました。

豊田市では、地元金融機関や商工会議所との連携も視野に、人材育成としてのスクールだけでなく、令和4年度から新たに創エネの補助金や相談窓口なども設けられ、トータルで脱炭素化に向けた支援が進んでいます。

現在、第2期スクール生の募集を行っており、今後もスクール生が中心となり、市内の脱炭素経営が牽引されていくことが期待されます。

農業・農村の「多面的な機能」の維持・発揮に向けて

末次優花：
都市・地域プランニンググループ

農業・農村には、お米や野菜などの農産物を生産・供給する機能以外にも様々な働きがあります。

例えば、田畑には一時的に雨水をためることができるため、洪水を防ぐ働きがあります。また、棚田のように斜面に作られた田畑は、耕作が続けられていると、雨水が田畑に貯留され、地下水が急激に増えないため、土砂崩れ等の防止につながります。この他にも、美しい農山村の景観が保たれていたり、様々な生き物の生息場所となるなど、私たちは気付かずに農業・農村の「多面的機能」の恩恵を受けています。これらのことから、「業」として農業を続けることが難しい農地も、「農空間」として保全していくことが望まれます。農林水産省では、このような多面的機能を維持・発揮に向けて、多面的機能支払交付金、中山間地域等直接支払交付金等の施策が行われています。

多面的機能支払交付金は、農業者や地域住民などの個人、農業法人や自治会などの団体などで構成された活動組織が主体となり、「地域共同」による様々な活動に活用されています。例えば、農用地や水路等の地域資源の基礎的な保全管理、老朽化が進む農業用排水路等の長寿命化のための補修・更新、さらには、生きもの調査や農業体験イベントなどの地域住民向けの啓発活動などが行われています。

交付金により農空間が保全されている地域がある一方で、非農業者など多様な主体の参画や広域化による対象組織のさらなる体制強化や取組拡大、事務等の負担軽減などが全国的な課題として、指摘されています。

アルパックでは今年度、地域産業イノベーショングループとともに、兵庫県において、県内の各地域で今後も多面的機能が維持・発揮できるように、活動組織を支援する仕組みづくりについて検討しています。

農道の補修

農業体験イベント

写真出典：多面的機能支払制度活動取組事例集
（発行：兵庫県多面的機能発揮推進協議会）

「木地師と漆 - 未来を紡ぐ伝統文化」シンポジウムを開催！

髙瀬咲：
地域再生デザイングループ

9月18日(日)に東京国立博物館平成館にて滋賀県東近江市主催の公開シンポジウムが開催されました。

当日は、台風の接近に伴い強い雨が降り続き、お足元が非常に悪い中でしたが、滋賀から離れ遠方にも関わらず、関東近郊を中心に約150人の方にご来場いただき、改めて木地師のネットワーク力、木地師文化への関心の高さを実感しました。

第一部の基調講演では、東京藝術大学名誉教授・漆作家の三田村有純先生をお招きし、「日本の基層文化としての漆芸」と題し、日本の食文化と漆器の関わりや、材料としての漆の優れた点、これからの時代における漆文化の展望についてお話いただきました。

第二部では、三田村先生、東近江市の小椋市長、岡山県美作市の萩原市長、東近江市で木地師文化のアーカイブ事業を監修している龍谷大学須藤名誉教授、日本漆器協働連合組合の土田理事長にご登壇いただき、漆文化・木地師文化の重要さ、今後の展望について、行政、研究者、漆産業界、漆作家という様々な観点から、それぞれの熱い想いを伺うことができました。

来場者の方からも、「木地師という職業を初めてきちんと知ることができました。伝統工芸品への関心が高まり、良い品を日常生活にとり入れたいと思うようになりました。」「林業とのつながりなど大変勉強になりました。地域振興と伝統工芸の保全が進んでいく動きが実を結ぶことを楽しみにしています。」などのご感想をいただき、今後の活動につながる実りあるシンポジウムになったのではないかと思っています。

シンポジウムを契機に、今後も「木地師のふるさと発信事業」は躍進していく予定ですので、ぜひ皆さま応援お願いいたします。

パネルディスカッション

会場の様子

全国漆器展

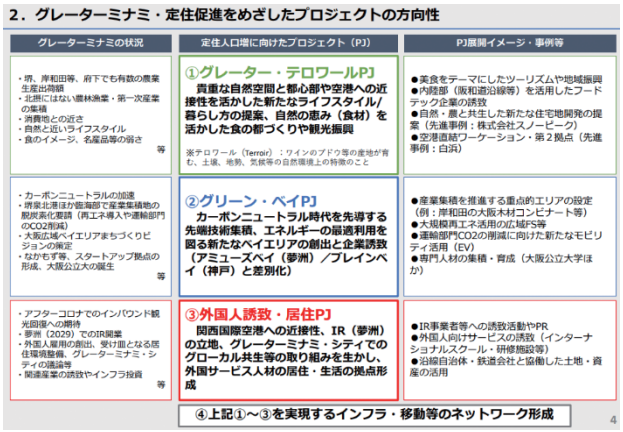
大阪商工会議所のグレーターミナミの提言づくり

山部健介：
地域産業イノベーショングループ

大阪商工会議所では、大阪都心南部（難波、新今宮、阿倍野・天王寺・上本町エリア）と大阪府南部地域（泉州・南河内エリア）を「グレーターミナミ」と位置付けており、一体的な都市経済圏として活性化に取り組んでいます。

人口減少やコロナ禍によるインバウンド客の減少による影響を受けつつも、関西国際空港から世界につながる地政学的な優位性を活かすことが求められています。アルパックでは、今後のグレーターミナミにおける機能強化に向けた提言に係る各種調査、研究を支援しました。

提言の中では、グレーターミナミにおける自然や立地環境、産業集積、多様な観光資源などをふまえて、①グレーター・テロワール、②グリーン・ベイ、③外国人誘致・居住という3つの方向性を示しています。



グレーターミナミ・定住促進をめざしたプロジェクトの方向性

1つ目のグレーター・テロワールは、豊かな「自然」、それがもたらす豊富な「地域食材」、そしてそれらを活かす「観光」といった潜在的な魅力（可能性）を生かしつつ、「暮らし」とセットで取り組むことで、南大阪全体のブランディング化を図り、活性化につなげるものです。2つ目のグリーン・ベイは、カーボンニュートラルへの世界的な関心の高まりをふまえ、グレーターミナミにおける大学の研究機能・技術シーズと民間企業の「知」を掛け合わせることで、ベイエリア全体としてイノベーティブな空間を創出するものです。3つ目の外国人誘致・居住は、多様な外国人の雇用や受入拠点を形成しつつ、新たな産業活力の創造に向けて、外国人の活用を積極的に推し進めるものです。

今後は、グレーターミナミの各自治体間への提言の共有、関係自治体や商工会議所等による国への働きかけ、沿線事業者や関係自治体におけるプロジェクトの具現化などを通じて、グレーターミナミのプレゼンス向上が期待されています。

民間発意の官民連携への提言
～ポストコロナのまちづくりを見据えて～

木下博貴：
地域再生デザイングループ

新型コロナウイルス感染症の拡大は、人々の働き方、移動、余暇の過ごし方など、これまでの生活を大きく変えるきっかけとなりました。

新型コロナウイルス危機において、いわゆる「三密」を回避することが必要とされる中、満員電車や都心のオフィスなど「都市空間内の過密」という課題が改めて顕在化し、新型コロナウイルスと共存するニューノーマルに対応した働き方や住まい方への変革が求められます。また、テレワークやオンライン会議など、リモートサービスの活用・定着が進み始まっています。

こうした変革を迎える中、名古屋商工会議所では、不動産や輸送・流通、商業、情報、都市インフラ等を担う会員企業の若手からなる「名古屋まちづくりビジョン研究会」を立ち上げ、「ポストコロナを見据えた名古屋のまちづくり」をテーマに、各企業の取り組みや幅広いアイディア等の意見を出し合い、名古屋市の「都市計画マスタープラン２０３０」で示された将来のまちづくりの方向性にコロナ危機を契機とした新たな方策を検討しています。現在、事務局としてお手伝いさせていただいており、今後「名古屋まちづくりビジョン２０３０（提言）」として、とりまとめ、公表される予定です。

提言では、民間発意のアイディアや取り組みの視点で整理されていますが、ポストコロナを見据えたまちづくりには、多様な公民連携が不可欠であり、民間事業者の積極的な参画やプラットフォームなどによる行政との情報共有、推進体制の役割が、これまで以上に重視されるのだろうと感じるところです。公表後には、改めてご紹介させていただきたいと考えておりますので、引き続き、よろしくお願いします。

公開空地を活用した「居心地のいい空間」を創出
（名古屋駅周辺）

新人紹介

フットワーク軽く

酒見知里
よかネット（九州事務所）

初めまして。9月1日よりよかネット（九州事務所）に入社致しました、酒見知里（さけみちさと）と申します。愛知県扶桑町で生まれ育ち、よかネットへの就職を機に福岡県へ引っ越してきました。

私は苗字の「酒見」が好きです。愛知県に住んでいた時は珍しく、酒の見（さけのみ）と自己紹介のキャッチフレーズとして使用していました。しかし、残念ながらお酒は強くないので、これから少しずつ九州の芋焼酎など挑戦していきたいと思っています。「酒見」の由来は福岡県大川市酒見という場所のようで、２０００年近くの歴史深い神社もあり、福岡県に住むことで「酒見」の歴史も感じていきたいです。

私が町づくりに対する思いを強くしたきっかけがあります。前職で、三重県のある小学校に訪問した際に、バスで山を越えて通学をしている子供がいました。前から通学に困っている子供がいることは知っていましたが、実際に学校の合併で小学校が遠くなり通学に大変な思いをしている子供を見ることで、「町全体で子供を育てる」という言葉の意味をより実感することができました。

幅広い要求に柔軟に対応するため、多面からものごとを見る目を持ち、何度も粘り強く課題に対して考え抜きたいと思います。そのために日々学び、何に対しても素直でいることを忘れずに業務に取り組んでいきます。そして、少しでも未来の子供たちが住みやすい町へと発展する力になればと思います。

適塾路地奥サロン報告

適塾路地奥サロン実行委員会

47回
2022年7月25日

「みんなでかたる　まちづくりと言わないまちづくり」
講師　熊本大学大学院先端科学教育部
准教授（地域風土計画研究室）　田中尚人氏

第47回では、田中尚人氏をお招きしました。

講演では、ご自身が関わられている地方都市でのまちづくり活動の事例をご紹介いただきました。講演の初めには、「持続可能」とは変わり続けることであり「不易流行（変わらないことと変わり続けること）」が大切であるということをお話いただき、参加者からも納得の声が聞かれました。

事例紹介の中では特に、地域の中学生が地域の「今」を次世代に伝えるための映像制作の事例において「子どもたちが地域を知り、地域を考え、それを伝えていくことで、地域のことが自分事になり、地域の持続可能性につながる」という地方都市でのまちづくりにおいては重要な要素となる次世代の存在と地域を自分事として捉えることの重要性をご紹介いただきました。

お話から、地域の方々だけでなく、ご自身も地域を楽しまれている様子が伺われ、まさに「まちづくりと言わないまちづくり」を体現されており、私も地域を楽しみながら関わり続けたいと思いました。（内野絢香）

48回
2022年8月26日

「長屋再生から始まる地域の小さな暮らし～オープンナガヤ大阪の取り組みと大阪長屋の改修事例～」
講師　大阪公立大学大学院生活科学研究科
准教授　小池志保子氏

第48回を迎えた適塾路地奥サロンでは、小池志保子氏をお招きし、「長屋再生から始まる地域の小さな暮らし」という題目で、大阪長屋の改修事例や長屋で繋がる素敵な人々のお話をいただきました。

講演会では、実際に小池先生が主体となって取り組まれている「須栄広長屋」を中心に、長屋改修のデザイン手法を丁寧にご紹介いただきました。リノベーション理論として挙げられていた、①住み継ぐための保存とデザイン、②近代長屋の住み継ぎと大阪の住文化の持続の２点は、単に空き家問題を解決するに留まらずに、地域やコミュニティの活性化、大阪らしい住文化の継承にも繋がり、大量に存在する「建築ストックの可能性」を改めて感じさせられました。

参加者からは「ぜひ長屋に住んでみたい」という声があった一方、「改修費用は何年で回収するのか」という現実的なお金の話もあり、この当たりはまだまだ議論するべき余地が残っているとも思いました。長屋という存在が、いつかは大阪のシンボルとなることを願って、これからも何らかの形で長屋に関わっていきたいと思います。（山口泰生）

近況＆イベントのお知らせ

受賞しました

一丸となって取り組んだ結果が成果に。来たる未来に向けて続く夢想

千里ニュータウンのＵＲ賃貸の将来のあり方を検討した業務がＵＲから表彰を受けました

UR 千里 20 調査チーム（山崎、嶋崎、和田、岡崎、塗師木、竹内、三宅）

本誌 226 号（2021 年 3 月号）「千里ニュータウンが循環するための公的賃貸住宅の役割を夢想する」で紹介した「千里ニュータウン及び周辺団地におけるストック再編事業化検討調査業務」が、独立行政法人都市再生機構（ＵＲ）西日本支社が実施している「令和４年度建設コンサルタント業務等優良受注者等表彰」を受けました。

この表彰は、毎年ＵＲ発注の工事や業務について、優秀な成績を収め、機構の業務に貢献した施工業者及び建設コンサルタント業務等受注者に対し感謝状が贈呈されるもので、西日本支社では昨年度よりコンサルタント部門にも表彰されるようになりました。

本業務は、マスタープラン検討チーム（生活デザイングループ）と建替計画検討チーム（建築プランニング・デザイングループ）が一丸となって取り組み、特に次世代を担う若手が力量を発揮し、最後までまとめ上げました。中には、熱を入れすぎたのか、千里の魅力に取りつかれたのか、業務進行中にニュータウン内の団地に引っ越しをするものまで現れました。さすが現地主義のアルパックです。

千里ニュータウンはまちびらきから 60 年が経ち、一部では既に再編が進められています。今回の表彰は、これまでの「全面建替え＋残地民間処分型」ではない、ＵＲが残地を所有しつづけるケースも含め、持続可能なストック再編は如何にあるべきか等について比較検討・提案を行ったことが評価されたと聞いています。社会環境が変化していく中で、今ある団地の魅力を継承しつつ、将来に亘りまちが持続していくためにはどんな再編が望ましいのか、夢想は尽きません。

事務所だより

大　阪

「商店街の引力」

大阪事務所　中村孝子

コロナ禍の在宅勤務続きで、最近、運動不足を解消するため商店街を歩いています。例えば、大阪屈指のコリアンタウン「鶴橋商店街」を探検しています。韓国グルメや食材店、コスメやチョゴリのお店もあり、気軽に海外旅行感覚を楽しめます。それは、昼の顔。商店街をさらに奥に進むと鮮魚の卸売市場があり、出勤前に立ち寄り、威勢のいいおじさん相手に食材をゲットします。広い商店街はどこが入口かわからない、道もたくさんあってなかなか複雑です。

さて、夜はというと朝や昼間の姿とは一変します。友達と銭湯に行って夕飯を食べて、シャッターが下りた商店街を歩くと薄暗い路地は巨大な迷路みたいです。スマホをみると位置がわかるのですが、あえて使わずうろうろします。なかなかスリリングです。今夜も摩訶不思議な引力に吸い寄せられるように、終わりのない夜を楽しみに行こうと思います。

レターズアルパックのバックナンバーの公開！

レターズアルパック編集委員会

名古屋事務所の開設を機に ARPAK　NEWSRETER（現在のレターズアルパック）は、1983 年 7 月に創刊しました。発刊記念号 0 号では、「ARPA・K のことをシンク・タンク、コンサルタント、設計事務所何とでも呼んで頂いて結構ですが、とにかくこの種の仕事は人と人とのふれあい、情報と情報の交流にこそフロンティアがあると思っています」とあります。その思いは、現在も変わりません。

さて、この度、ホームページに 0 号からのバックナンバーを掲載しました。今後もより充実した内容で情報発信をしていきます。ぜひ、ご覧ください。

https://www.arpak.co.jp/lettersindex

Letters Arpak
レターズアルパック

〔レターズアルパック〕235号　2022年9月発行（株）地域計画建築研究所　https://www.arpak.co.jp

まちかど

大阪事務所近辺の個人書店に遊びに行きました

地域再生デザイングループ　髙瀬咲
建築プランニング・デザイングループ　新開夏織

本好きで全ての本屋を愛する髙瀬の声掛けで、小島、筈谷、新開の若手4人で個人書店に行ってきました！

若手同士の交流を目的に、昨年度より自主勉強会と称した集まりを有志で開催しており、ほぼ話したことのない人もいた当初、パーソナリティを知ろうと「自分の本棚の写真」を共有するアイスブレイクを行いました。本棚を介して、まちづくりという共通の興味が見えたり、その人の印象と全然違う本があったり、本の内容から入手したときの話まで色々な話が出来て仲がぐっと深まった気がしました。（髙瀬）

共有した自分の本棚

◆個人書店へ

「本棚共有」から話が弾み、大阪事務所近辺の2つの書店にみんなで行きました。

1つ目の〝FOLK old book store〟は地下にある入り組んだ秘密基地のような空間の中に雑貨やCD、服や本がぎっしり並んでいるお店でした。ひとつ本を手に取るとその次の本が気になって、気が付くと別のジャンルの棚にたどり着き、楽しい迷宮を冒険している気持ちになりました。もう1つの〝Calo Bookshop & Cafe / Calo Gallery〟は対照的に、カフェ・ギャラリーが併設した開放的な空間で、厳選された魅力的な本が全員主役のように並んでおり、ひとつひとつの本達と向き合って出会える場所だと感じました。

本好きの私にとって個性溢れる棚の構成や色んな気持ちで新たな本と出合える空間と体験が個人書店の魅力です。誰かと一緒に書店にいくことは少ないのですが、それぞれが本に向き合うという別々の体験のようで、同じ空間で本とともに一緒に濃厚な時をすごした感覚もあり、最高の1日となりました。一緒に時を過ごした新開さんの感想をお聞きください。（髙瀬）

私はどちらかと言うと読書は苦手で、あまり本の世界とは近いところにいませんでした。そんな私ですが、髙瀬さんたちに誘ってもらい、今回初めて個人書店に行きました。

これまで私が本屋さんに行くときは、見たいジャンルの場所に行き、目的の本を探すというスタイルが一般的でした。しかし、個人書店には選び抜かれたこだわりの本がたくさん並んでおり、様々な感性に触れるうちに、店内を一周し終える頃にはまるで思考の旅に出たような、充実した時間を過ごすことができました。（新開）

個人書店〝FOLK old book store〟

◆シェア型図書館

一方で、まちなかに小さな図書館を作る動きも増えているようです。昨年若手で豊岡に行った際にも、一箱単位で棚を借り、自分の好きな本を貸し出すことができる〝シェア型〟の図書館がありました。ここでは単に本を借りるだけでなく、読んだり買ったり、自由に過ごすことができ、まるで暮らしの一部にこの場所があり、本を通じて様々な人とも出会うことができる地域の「居場所」のような場所になっていました。

本好き髙瀬さんとの本屋巡りをきっかけに、本を通じた新しい楽しみ方を知ることができました。これを機に、自分のこだわりの一冊を見つけてみたいと思います。（新開）

シェア型図書館〝だいかい文庫〟

表紙写真：グンナール・アスプルンドのデザインによる美しい図書館（ストックホルム市立図書館／撮影 坂井信行）

「レターズ アルパック」は、ホームページからもご覧いただけます。

arpak
アルパック（株）地域計画建築研究所　Architects, Regional Planners & Associates, Kyoto
https://www.arpak.co.jp　E-mail：info@arpak.co.jp

本社・京都事務所	〒600-8007 京都市下京区四条通高倉西入立売西町82	TEL(075)221-5132	FAX(075)256-1764
大阪事務所	〒541-0042 大阪市中央区今橋3-1-7 日本生命今橋ビル10F	TEL(06)6205-3600	FAX(06)6205-3601
名古屋事務所	〒450-0001 名古屋市中村区那古野1-47-1 名古屋国際センタービル7F	TEL(052)462-1030	FAX(052)462-1061
東京事務所	〒101-0047 東京都千代田区内神田1-15-7 いちご大手町ノースビル4F	TEL(03)5244-5132	FAX(03)6273-7715
九州事務所	〒810-0802 (株)よかネット：福岡市博多区中洲中島町3-8 福岡パールビル8F	TEL(092)283-2121	FAX(092)283-2128
滋賀営業所	〒527-0012 東近江市八日市本町9-14	TEL(0748)36-2065	FAX(0748)36-2168
ホーチミン（ベトナム）	No.187/7, Dien Bien Phu Street, Da Kao Ward,District1, Ho Chi Minh City, Vietnam		

再エネ100宣言 RE Action
この用紙は「びわ湖の森を元気にする」kikitoペーパーを使用しています。